



# 卓 話

## 「史話・東京の坂道」

坂道研究家  
朝倉 毅彦氏

東京の坂道について調べていると、思わぬところで坂道で起きた意外な出来事や人物に出会ったり、逆に読んでいた歴史関係の書物の中に有名無名の坂道が現れて来たりして、坂道に対する興味がますます深まり、さらに詳しく知りたい、もっと調べたいという気持ちにさせられてしまう。



前者の代表的な例が、そもそも私が東京の坂道に強い関心を寄せるきっかけとなった、四谷の「津の守坂」（坂の名の基になった松平摂津守家が、幕末の会津藩主で京都守護職を勤めた松平容保や尾張藩主徳川慶勝らの生家で、そこで彼ら兄弟が生まれ育った）であり、後者の例が「三宅坂」「牛込焼き餅坂」等である。

この他、例えば忠臣蔵の芝居などで有名な赤坂の「南部坂」や、「紀尾井坂」に於ける大久保利通暗殺事件、或は「浄瑠璃坂」の仇討ち等のように、坂道に特に興味を持つようになる前から、事件や出来事と坂道をセットで知っていたものもある。

又調べている坂道とその周辺の江戸の地図を丹念に見ていると、坂道に関連する人物や、坂道とは関係なくてもかねて名前を知っている歴史上の人物の屋敷を、偶然に見つける事があり、これも私の楽しみの一つである。

東京の町並みは、明治元年（1868年）の東京遷都以来、関東大震災（大正12年・1923年）や第二次世界大戦の東京大空襲（昭和20年・1945年）等を経て随分変わってしまったけれども、以外に江戸時代の道筋が現在も残っている所が多く、特に坂道はその形状や勾配は変わっていても、その位置は江戸時代と変わっていない例が多い。

坂道を基点として、江戸時代の地図と現代の地図を比べてみれば、今から何百年か前にはその辺に何があったのか、そして現代はどうなっているか等、

容易に知る事が出来る。

「蜜社の獄」で犠牲になった渡辺華山については、かねてある程度の知識はあったものの余り詳しく知っていた訳でもなく、というより以前読んだ本の細かい所はあらかた忘れてしまっていたというのが実情であるが、拙著『江戸・東京 坂道物語』で取り上げた「三宅坂」の執筆にあたって改めて関連する本を読み返した所、華山と「三宅坂」のみならず、捕えられる前に自殺してしまった小関三英が「三べ坂」と、高野長英が「貝坂」と関係があったという事に気が付いたのである。

この3人と坂道との関係というのは次のようなものである。

渡辺華山：三宅坂

三宅坂の名の基となった三宅候の家臣で、その藩邸内で生まれ「蜜社の獄」により国許（三河・田原）蟄居の判決を受け田原に移送される迄その藩邸で生活していた。

小関三英：三べ坂

事件当時、三べ坂の名の基になった「三べ」（岡部、安部、渡辺の諸侯）の一つである岡部候（岸和田藩主）の侍医だった。

高野長英：貝坂

麹町貝坂に蘭学塾を開いていた。

牛込の「焼き餅坂」については、『新撰組始末記』（子母沢寛著）等に小石川小日向柳の坂上に近藤勇の道場があったと記されているので、その坂とは何坂だろうかと調べたところ、それは小石川の柳町ではなく、牛込の柳町の間違いで、その坂は「焼き餅坂」だという事が分かったのである。

子母沢寛が何故そのような間違いを犯したのかというと、「焼き餅坂」の坂上にあった近藤勇の剣術道場「試衛館」から、文久3年（1863年）幕府の浪士募集に応じて上洛し、のちに新撰組の幹部になった面々のうち、唯一戊辰戦争後まで生き残った、永倉新八（維新後、杉村家の養子となり、杉村義衛と名乗る。晩年は北海道・小樽に住居）の残した回想記で、試衛館道場が小石川の柳町の坂上にあったと述べている為と思われる。

この回想記は、晩年の永倉新八から北海道の小樽

新聞の記者が聞き取ったものを文章にまとめ、同紙に掲載したもので、この時永倉は既に70歳を超えた高齢であり、かつ50年程前の事を話しているので、記憶違いや勘違いがあったとしてもやむを得ない事であろう。

私のやり方は、数ある東京の坂道の中から面白そうなものを選んで調べ始めるのであるが、実際当たってみると余り面白くない事もあるけれども概ね面白く、自分の予想を遥かに超えて、様々な物語が展開されて行く事もあり、それが楽しくて中々坂道から離れられないのである。